日本中国語学会会報　2020年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　　小野秀樹（日本中国語学会会長）……1
2020 年度全国大会総括……2
2020 年度学会奨励賞の選考経緯……4
支部例会実施報告　2020.6 - 2020.12……5
会議報告……6
例会および全国大会開催のお知らせ……13
事務局からのお知らせ……13

ご挨拶　　小野秀樹（日本中国語学会会長）

年の瀬が迫ってまいりました。本年 2 回目のご挨拶を申し上げます。

今年度の全国大会は、11 月 6 日夕刻の理事会から始まり、11 月 15 日にネット上での質疑応答が終了し、不完全なかたちではございますが、全プログラムをなんとか無事に遂行することができました。これもひとえに関係各位のご尽力の賜物です。今大会は現地での開催は実現できず、インターネットを利用した変則的な形式で行ないましたので、いくつかの委員会や関係部門には例年以上のご負担をおかけいたしました。中でも、吉川雅之大会運営委員長ならびに鈴木慎吾ウェブリソース委員長には、たいへんご苦労をおかけしました。また、招待講演については講師の荒川清秀先生、開催校の塩山正純先生、当日補助をしていただいた愛知大学大学院生の戸谷将義さんのご協力により、今大会で唯一、学術的な配信をしていただくことができました。この場をお借りして、あらためて厚く御礼申し上げます。さらに、理事、評議員のみなさま、各委員会委員長ならびに委員各位、オンライン書店出展の統括者である金星堂の川井義大さまと各書店のみなさま、そして、さまざまな難局の処理に対応してくださった事務局幹事のお三方にも、心より感謝申し上げます。

総会に関しては、ご異論やご質問は出ませんでしたので、略儀ではございますが審議事項についてご承認いただいたということにさせていただきます。研究発表の質疑では、予想していたよりも質問が少なめだった印象がありますが、チャット形式の実施でしたので、参加を躊躇った方もおられたのかもしれません。そのような状況のなか Slack でご質問やご意見をお寄せいただいた会員諸氏にお礼申し上げます。質問が届かなくて些か寂しい思い

をされた発表者もおられるかと存じますが、引き続き研究の内容をさらに充実、完成させた上で、会誌『中国語学』への投稿もご検討いただけましたら幸いです。

今大会において、編集委員会と大会運営委員会では半数の委員の交代があり、それぞれ新委員長が決まりました。任期を終えられた委員長ならびに委員のみなさまにおかれましては、長期間のお務め本当にお疲れ様でございました。また新たに委員長、委員に就任されたみなさまにおかれましては、何卒よろしくお願い申し上げます。辞典編纂委員会では、現在平田昌司委員長が精力的に編集作業を進めておられ、順調にいけば来春にはほぼ全体的に原稿が整う予定になっています。また、学界展望編集委員会は、今年度から常設委員会として設置することが承認され、秋谷裕幸委員長のもとで鋭意原稿作成を行なっていただく予定です。さらに今月 19 日には関西および関東支部においてオンライン例会も開催されます（この文章を執筆しているのは支部例会開催日より前です。この学会報が公開される時には無事に終わっていることと思います)。学会における諸活動は、コロナ禍の状況下においても留まることなく続いております。9月にいったん中止した第2回中国語学セミナーも、年明け後の 2 月か 3 月に開催することを目指して目下準備作業を行なっております。引き続き、会員のみなさまのご支援とご協力を切にお願い申し上げる次第です。

今年の全国大会が終わってまだ間もないですが、すでに来年度のことを考え始めなければなりません。ご存知の通り、新型コロナウイルス感染症は、11 月下旬から第三波と呼ばれる状況になっており、本格的に冬を迎えて、このあとどのようになるのか予断を許しません。医療方面でも、徐々に治療や予防の方策が整ってくるとは思いますが、全世界的なレベルで進行していることもあり、わたしたちが完全にもとの生活を取り戻すまでには、まだまだ時間がかかることでしょう。本学会においても、すべての活動や行事を従来通りのかたちで安全に行なうことができるようになるのは、次期会長および理事が就任されてからになるのではないかとも予想いたします。その意味において、来年度はまだ社会情勢が完全に復旧していないことを想定しながら、今年の経験も生かしつつ、できるだけ円滑に研究活動と交流が行なえるように準備を進めて参りたいと思います。状況によっては、来年度も会員のみなさまに何らかのご不便をおかけしたり、ご協力を仰いだりする点も出てくるかもしれませんが、今年度と同様に、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、会員のみなさまのご健康とご無事を心よりお祈り申し上げます。

［2020 年 12 月 15 日記］

2020 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 70 回大会は、11 月 7 日（土）と 8 日（日）に愛知大学（名古屋市中村区）およびオンラインで開催されました。

(1) 参加者数

招待講演の聴衆は 80 名でした。書籍展示は 16 社（賛助会員 13 社、それ以外 3 社）でした。

(2) 総評

今回は第 70 回という節目の大会であり、記念大会という位置付けを与えることで、昨年の理事会・評議会・総会において承認を頂戴しておりました。しかし、全世界に拡散した COVID-19 のためにそれを実現することができなかったこと、大会運営委員会としてまさに断腸の思いであります。日本国内では、COVID-19 は繰り返し大きな脅威として私たちの前に現れています。感染の拡大を防ぐという観点から、対面開催ではない形態での開催を選択せざるをえませんでした。会員各位におかれましてはどうかご理解を賜りますようお願い申し上げます。

対面開催に取って代わる開催システムの構築に当たっては、会長・理事会・事務局・ウェブリソース委員会の先生方、開催校スタッフ各位から格別のお力添えを頂戴しました。また、昨秋以来対面開催を目指して準備を進めてくださった開催校のスタッフ各位からは、対面開催の断念後もそれ以前と変わらぬ真摯なご対応を頂戴しました。併せて衷心より感謝申し上げます。

今回は開催形態が従来と大きく異なったわけですが、会期内のスケジュールにも変動がありました。招待講演は大会 2 日目に行われ、荒川清秀会員（愛知大学名誉教授）に「日中同形語を歴史的に考える――江戸の蘭学文献を史料に」という演題でご講演いただきました。そこでは、江戸後期から明治期にかけての重要な文献と、そこに見られる日中同形語の例が多数紹介されました。質疑応答では参加者から、今後様々な角度からの考察が見込まれる有望なテーマであるという指摘が出されました。本学会としてオンラインによる初めての講演でありましたが、無事終了することができました。講演者をはじめご参加くださった会員各位には心から感謝申し上げます。

分科会研究発表・ポスター研究発表については、開催そのものが危ぶまれたにも拘わらず、多数の応募を頂戴しました。頂戴した温かい励ましに心から感謝申し上げます。提出された予稿に対する質疑応答は、11 月 8 日から同 15 日までという期間を設け、Slack を用いて行いました。こちらも本学会として初めての試みでしたが、大過なく終了することができました。

尚、予稿集は昨年度から電子版での公開を開始しましたが、今回の様な環境下では電子版が必要不可欠のものとなることが浮き彫りになりました。寧ろ、製本された図書形態でも発刊を続けていくかどうかを検討する時期に入ったと考えています。

(3) 課題

来年度は、対面開催が困難な状況を想定して、開催の準備を進めていくことになります。特に、オンラインで各種発表を行う場合は、多くの課題が想起されます。例えば、今回は Slack を用いて質疑応答を行ったわけですが、必ずしも活発な質疑応答が実現したとは言えない状況でした。より望ましい開催方式の検討も含め、大会運営委員会として英知を結集して臨む所存ですので、会員各位におかれましてはご支持を賜りますようお願い申し上げます。

II.来年度の全国大会にむけて

COVID-19 の流行という要因が存在しているため、現時点では不確定要素が少なくありません。開催校、開催形態、ワークショップ

の応募期間、分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間といった重要事項については、確定し次第学会ウェブサイトに掲載します。特に、研究発表の応募については、従来の電子メールによる受付ではなく、ウェブサイト上に設けたフォームで受付を行うことになりましたので、ご留意くださいますようお願いいたします。

（大会運営委員会）

2020 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2020 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』266 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 2 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 2 本について慎重な協議を行った結果、以下の論文を 2020 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文
雷　瑭洵氏
古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变

【選考の経緯】

本論文は、古代中国語において「授与」「取得」いずれの意味をも表し得る動詞であった“假”“借”の通時的変遷について論じたものである。これらは先秦・漢代において「授与」「取得」の意味を表す場合に、構文・音韻いずれの面でも区別がなされていたが、唐代までの間に、授与だけでなく取得を表す場合でも二重目的語をとるようになって構文面での区別がなくなり、宋代以降に音韻面での区別も消失した結果、多義的な二重目的語構文が出現したことを指摘している。

本論文で検討の対象となっているのは“假”“借”という二つの動詞のみであるが、先秦のいわゆる四声別義・清濁別義など広義の形態論と構文論との関わり、及びその通時的変化を扱っており、中国語の体系全体に関わる重要な問題を論じたものと言える。そして、構文面での“假”“借”に関する「授与」「取得」の使い分けの発見、取得を表すものが再分析を経て二重目的語構文を形成するようになったとする仮説など、少なからぬ新しい知見を提供している。

選考の過程においては、漢代以降における“從”や“予/與”等を用いた構文との関わりについて、より踏み込んだ分析が必要という問題点も指摘された。しかしながら、先秦から唐宋までの言語事実を幅広く視野に収め、複雑な状況の中から構文的条件を見出すなど、著者の資質の高さを窺うことのできる優れた論文であるとの評価は揺るがなかった。よって、編集委員会は全員一致で本論文を奨励賞授賞論文として推薦し、理事会においてそれが承認された。

今後は、より網羅的で一般性の高い記述を目指して、ますます研鑽されることを期待する。

（編集委員会）

支部例会実施報告　2020.6 - 2020.12

◆関東支部例会

◇2020 年 12 月 19 日（土）午後 1 時～：オンライン（Zoom）での開催

・今村圭（神田外語大学・非）:『水滸伝』にみられる複合使役動詞について

兼語式を構成する使役動詞を歴史的にみると、主に用いられるのは単音節のものである。しかし、二つの単音節の使役動詞を組み合わせて使役動詞として用いている例もみられる（本発表ではこれを複合使役動詞と呼ぶ)。例えば、“教令”“着令”“放教”などである。これまでの研究では、複合使役動詞の存在を指摘するにとどまり、それらの用法などに言及したものはほとんどみられない。本発表では、『水滸伝』を対象資料とし、どのような複合使役動詞が存在するのか、またそれらはどのように用いられているのかを考察する。さらに、その用法がどのように決まっているのかについても、構成要素との比較を通して考察する。

・川下崇（東京都立大学・院）：『元朝秘史』モンゴル語「動詞＋使役態形成接辞＋受動態形成接辞」に対応する傍訳漢語について

従来『元朝秘史』モンゴル語における使役形式、受動形式に対応する傍訳漢語の存在が指摘されている。すなわち、『元朝秘史』漢字音訳モンゴル語「動詞＋使役態形成接辞」の形式「動詞＋兀魯、温勒（ul/ül）、中合（qa)」は、傍訳漢語において「教＋動詞」または「動詞＋教」の形式をとり、「動詞＋受動態形成接辞」の形式「動詞＋黒荅（qda)、克迭（kde)、荅（da)、迭（de)」は、傍訳漢語において「被＋動詞」の形式をとるということである。本発表では、従来論じられてこなかった「動詞＋使役態形成接辞＋受動態形成接辞」の形式「動詞＋兀勒荅、温勒荅（ulda)、兀勒迭（ülde)」の傍訳漢語について検討する。

・高柳浩平（中央大学・院）：魏晋南北朝期の「V1＋(O)＋使/令＋V2/A」形式について

魏晋南北朝期には、直接使役を表す「V1＋(O)＋使/令＋V2/A」形式が活発に用いられていたが、同形式が如何に形成されて、内部の語に如何なる特徴があったのかに関する研究は数少ない。本発表では文献調査をもとに、「使/令」と V2/A 部分の変化を踏まえて同形式の形成過程を論じつつ、農書や医書といった説明文体的な文献中だけでなく、口語性の強い漢訳仏典中にも現れていることを確認して、この分析的使役構文が文体を問わず広く用いられていたことを明らかにする。また、同形式が「不足した使役義を補う」ために生じたのではなく、意味や機能の不足なく発展して、生産的に用いられた使役構文の一つであったことを論じる。

◆関西支部例会

◇2020 年 12 月 19 日（土）午後 1 時～：Zoom を用いた遠隔での開催

・葉晨傑（京都大学・院）：蕭山方言にある持続相の連続形式について

蕭山方言には、「带东」「带亨」という二つの持続相の連続形式が存在し、本発表はこれらの連続形式の接続、出現環境と意味について考察する。接続から見ると、動詞だけではなく、形容詞や存在動詞「来」の後ろにも連続形式は来られる。ただし、項は必ず動詞や形容詞の前に来る。出現環境について、連続形式は平叙文では出現できるが、疑問文ではできない。命令文では「带

东」しか使われない。また、連続形式は動詞連続構文で用いられる他、単独で現れることもできる。意味から見ると、平叙文と命令文にある連続形式は互いに異なる。連続形式は平叙文では発見、指示、持続相の意味を持ち、命令文では指示、持続相と命令の意味を表す。

・申慧敏（大阪大学・院）：形容词前表程度的“再”和「もっと」

根据相关词典的解释，日语中表示程度的「もっと」除了能表示汉语中程度副词“更”的意义，在某些语义环境下还可以对应汉语中表程度意义的“再”。但是学习者往往忽略“再”和「もっと」的对应关系，产出如“*更多吃一点！”、“*电话声太小，请你更大点声。”、“*更便宜，我也不会买。”等不自然的汉语句子。本报告主要基于汉语学习者的偏误情况和具体例句，以情态范畴的“非现实性”作为理论基础对「もっと」和形容词前表程度意义的“再”的关系进行讨论，旨在解决日语母语者的汉语学习过程中和程度副词相关的部分问题。

・講演

平田昌司：中国語の多様性について

1843 年以降、西洋人が観察した中国語は、文字言語の統一性、口語の「官話」/地域標準方言/下位方言の重層性、方言間の規則的音韻対応、標準語の欠如がからみあっていた。さらにいわゆる Sinophone（漢語圏、華夷風）は単一の世界でない。一方で、本年 20 周年を迎えた「国家通用語言文字法」は、言語と文字の規範化・標準化・健康な発展を目標としている。近 200 年の歴史を通じて中国語の多様性をどうみるか、話題にしてみたい。

会議報告

■ 2020 年度第 2 回理事会

日時：2020 年 11 月 6 日（金）16 時～18 時

（Zoom によるオンライン会議）

出席者：小野秀樹（会長）；楊凱栄（副会長）；秋谷裕幸*、伊藤さとみ、遠藤雅裕、丸尾誠、吉川雅之**（以上理事）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；池田晋、今井俊彦、松江崇（以上幹事）

* 学界展望編集委員長を兼ねる

** 大会運営委員長を兼ねる

■ 2020 年度評議会

日時：2020 年 11 月 7 日（土）13 時 00 分～14 時 30 分

（Zoom によるオンライン会議）

出席者：構成員 59 名（定数 67 名）

■ 2020 年度総会

日時：2020 年 11 月 7 日（土）～11 月 15 日（日）

（みなし総会〔Slack による質問・意見受付〕）

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

松江幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2019 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助のぞく）		1001 名	－128
	（内訳） 顧問	5 名	±0
	名誉会員	15 名	－3
	通常会員	918 名	－102

		団体会員	5 名	±0
		海外会員	58 名	－24
賛助会員			20 社	±0

・〔昨年度除籍者〕67 名（国内会員 55 名 / 海外会員 12 名）［2019 年 11 月 7 日付］
・〔今年度除籍者〕53 名（国内会員 40 名 / 海外会員 13 名）
・ご逝去　1 名（比企 静雄会員）
＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 9 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

池田幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』266 号「彙報」を参照。
・新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020 年度前半の支部例会活動は自粛。10 月以降も対面による開催は引き続き自粛を続けるが、希望のあった支部にはオンラインによる開催を認めることとした。
・2020 年度 10 月以降のオンライン例会の開催予定は以下の通り。

北海道支部	開催しない
関東支部	2 回（12 月、3 月）
北陸支部	1 回（3 月）
東海支部	未定
関西支部	1 回（12 月）
中国支部	1 回
九州支部	1 回（12 月）※中止

2. 編集委員会報告

竹越委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第267号は、2020年10月31日に1,300部を発行した。
・学会奨励賞授賞者として以下の1名を推薦した。

雷瑭洵氏

「古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变」

・新旧委員の交代について

任期満了：遠藤雅裕、竹越孝、丸尾誠、雷桂林の各委員

再任：千葉謙悟、張佩茹、中西裕樹、森宏子の各委員

新任：飯田真紀、伊藤さとみ、宮本徹、李佳樑の各会員

3. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より以下の報告があった。

◆第 1 回辞典編纂委員会

日時：2020 年 9 月 14 日～9 月 21 日（メール審議）

出席者：平田昌司（委員長）、大西克也、小野秀樹、木津祐子、朱春躍、竹越孝、三宅登之、山崎直樹、楊凱栄

【議事】

・辞典編纂委員会経費の減額について

現在年度当たり 18 万円となっている辞典委員会経費について、2021 年度予算から他の委員会と同様の 12 万円に減額するよう事務局に提案することが了解された。

◆第 2 回辞典編纂委員会

日時：2020 年 10 月 18 日 14 時～15 時（Zoom によるオンライン会議、ホスト三宅登之会員）

出席者：平田昌司（委員長）、大西克也、小野秀樹、木津祐子、朱春躍、竹越孝、三宅登之、山崎直樹、楊凱栄

【議事】

１．辞典原稿（出版社入稿ずみファイル）の

閲覧権限共有候補者について

岩波書店に入稿ずみの原稿ファイル（管理方法については議事２を参照）について、査読委員を中心に人選し、不整合個所や補充すべき個所の有無についてチェックを依頼することが承認された。

２．辞典原稿出版社入稿ずみファイルの管理方法について

出版社入稿ずみファイルのみ、従来利用していた Dropbox からサイボウズ社の kintone（有料）に移行し、2020 年 11 月から 2021 年 3 月までの 5 カ月契約をすることにした。未入稿ファイルは従来どおりの管理とする。

３．その他

「中国語学辞典」進行予定等についての岩波書店からの照会内容につき意見交換をおこなった。

◆第３回辞典編纂委員会

日時：2020 年 11 月 17 日～11 月 24 日（メール審議）

出席者：平田昌司（委員長）、大西克也、小野秀樹、木津祐子、朱春躍、竹越孝、三宅登之、山崎直樹、楊凱栄

【議事】

・「中国語学辞典」についての岩波書店からの照会内容に対する意見をまとめ、結果を理事会に報告した。

◆中国語学辞典編纂作業の進捗状況について

2020 年 12 月 3 日現在で、整理済み原稿 800 項目を岩波書店に提出している。全体の項目数は 1100 項目前後を予定しているので、約 72％の進捗状況になる。残りの項目については、2021 年 3 月末の提出完了を目標とする。それぞれの原稿については、委員会、最終的には委員長の責任において整理・内容修正をおこなっている。

4. 学界展望編集委員会報告

秋谷委員長より以下の報告があった。

１．2019 年学界展望の編集

2019 年「学界展望　語学」は 2020 年 10 月 10 日発行の『日本中國學會報』第七十二集に掲載され、また 2020 年 10 月 31 日発行の『中国語学』第 267 号に転載された。

２．日本中国語学会内規の改正について

学界展望編集委員会が常設委員会として新たに設置されたことにともない、委員会に関する内規を以下のように改訂する。

◇内規の改正

改正前	**1. 委員会に関する内規（→第 15 条，第 16 条関連）** (1) 常設委員会として，編集委員会，ウェブリソース委員会，全国大会運営委員会を設置する。必要に応じて，理事会および評議会の承認により，期限を限って臨時委員会を設置することができる。

改正後	**1. 委員会に関する内規（→第 15 条，第 16 条関連）** (1) 常設委員会として，編集委員会，ウェブリソース委員会，全国大会運営委員会，学界展望編集委員会を設置する。必要に応じて，理事会および評議会の承認により，期限を限って臨時委員会を設置することができる。

・なお、学界展望編集委員会内規については『日本中国語学会々報 2020 年 6 月』に掲載されている。

5. 大会運営委員会報告

吉川委員長より以下の報告があった。

〈報告事項〉

5.1. 第 70 回全国大会の準備状況

5.1.1. ワークショップ審査結果

7 月 17 日（金）に応募締切。今回は応募がなかったため、ワークショップは行わないことにした。

5.1.2. 研究発表（分科会・ポスター）応募・採択結果

7 月 30 日（木）に応募締切。応募総数 58 件。内、有効応募総数 57 件。不受理 1 件（書類不備 1 件）。審査の結果、口頭発表 38 件、ポスター発表 4 件の計 42 件を採択した。不採択数は 15 件であった。（8 月 27 日持ち回り委員会決定）

5.1.3. 採択者公表後の対応

9 月 26 日（土）に行われた臨時理事会にて、今回は COVID-19 の問題のため対面開催を行わないことが決まった。この決定に従い、以下の如く対応することにした。

（1）招待講演

11 月 8 日（日）13:00 から 14:50 まで Zoom を使用してオンラインで行うことにした。講演の URL 情報は 11 月 2 日（月）から 6 日（金）正午までの期間、学会ウェブサイトに掲示した。

（2）分科会研究発表・ポスター研究発表

10 月 21 日から同 30 日までという期間を定め、この期間内に規定を満たした予稿集原稿が提出された発表については、本学会として第 70 回全国大会において研究発表がなされたと認めることにした。発表内容に対する質疑については、別途 11 月 8 日から同 15 日までという期間を設け、Slack を用いて行っていただくことにした。Slack に関する説明は、11 月 7 日（土）に学会ウェブサイトに掲示された。

期間内に規定を満たした予稿集原稿が提出されなかった発表については、研究発表を辞退したものと見なすことにした。但し、今年は特殊な状況のため、発表辞退に対して理由書の提出は求めないこととした。（10 月 7 日に全ての採択者に電子メールで通知）

（3）書籍展示

11 月 5 日から 11 月 15 日までの 11 日間という期間を定め、学会ウェブサイト上に特設ページを設けて展示を行うことにした。（10 月 23 日持ち回り理事会決定）

5.1.4. 予稿集について

予稿集原稿は合計 34 篇が所定の期間内に提出された。内訳は招待講演 1 篇、分科会発表 31 篇、ポスター発表 2 篇。

今回、予稿集は電子版のみで発行され、11 月 3 日に公開された。編成作業には大会運営委員会の委員 4 名が当たった。

昨年 12 月に発行された会報で予告したとおり、今回から予稿集原稿は所定のテンプレートを使用して作成していただくことになった。これにより、作成要領から逸脱した原稿が提出される事例は大幅に減少した。また、編集作業の合理化も実現できたので、次回も作成に当たってテンプレートの使用をお願いする。

5.2. 第 71 回大会について

5.2.1. 開催校について

今春以来会長とともに開催校の選定と打診に努めてきたが、COVID-19 の影響や各大学のご事情により、残念ながら現時点で開催校決定には至っていない。大会運営委員会では引き続き開催校の決定に向けて努力する。

5.2.2. 非対面開催の場合のルール構築について

来年度は、予め対面開催が難しい場合も想定して全国大会の準備に着手する。対面開催が難しい場合の運営規則をどう構築するかについても検討を行う。

5.2.3. 研究発表応募方法の変更

作業の合理化を推進するため、第 71 回大会ではウェブサイト上にフォームを設け、研究発表の応募を一元的に扱うことにした。(9 月 13 日持ち回り理事会決定)

従来、応募およびその受理では電子メールを使用してきたが、大きな変更となる。大会運営委員会では今夏以来、全国大会のニーズを満たすフォームツールの選定と模擬操作を行ってきた。詳細については、学会ウェブサイトに掲載するので、留意をお願いしたい。

5.3. 委員長・委員の交代

5.3.1. 次期委員長の選出

現任委員による互選により、前田真砂美委員を次期委員長に選出した。(8 月 23 日持ち回り委員会決定)

5.3.2. 委員の交代

①開催校代表委員

退任：塩山正純委員（愛知大学。2020 年開催校代表）

就任：未定（2021 年開催校代表）

②一般委員

退任：荒木典子、加藤晴子、李佳樑の各委員

就任：浦山あゆみ、橋本永貢子、福田翔の各会員

6.「第二回中国語学セミナー」について

小野会長より以下の報告があった。

・第二回中国語学セミナーは当初予定の 9 月 12 日の開催を中止し、年度内に時期を改めてオンラインで実施することとした。実施時期や方法については、WG を中心として全国大会終了後に検討を開始する。

【審議事項】

1. 予算案・決算案

1.1. 2019 年度会計決算案（資料参照）

・宮本前幹事による報告と説明、及び加藤宏紀前会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

1.2. 2021 年度会計予算案（同上）

・今井幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2. 四国支部の合併について

・四国支部評議員の秋谷会員から、四国支部は会員数が少なく、独立した支部として継続していくことが困難であるため、関西支部との合併を希望する旨の申し出があり、提案の通り承認された。

・正式な合併は 2021 年度の総会で決定する。

3. 2021 年度のオンライン体制について

・小野会長より、2021 年度も対面での活動ができない可能性があるため、全国大会等がオンラインで円滑におこなえるよう、予め運営・管理にあたる組織を構成しておきたいとの提案があり、提案の通り承認された。

4. 日本学術会議について

・第 25 期日本学術会議において、会員候補の任命が見送られた件について、その理由ならびに方針等の説明を要求する声明文を理事会と評議会の連名でウェブサイトに掲載することとした。

2019 年度会計決算書

2020 年 11 月 15 日総会承認

日本中国語学会2019年度会計決算書(案)(2019年4月1日～2020年3月31日)

〈収入の部〉 単位：円

収入	予算	決算
前年度繰越金	9,240,763	9,240,763
積立からの繰入金	2,640,000	2,640,000
通常会員・海外会員会費収入	6,000,000	5,278,200
賛助会員会費収入	660,000	600,000
『中国語学』売上金	405,032	405,032
予稿集売上金	450,000	704,079
学界展望補助金	300,000	300,000
通常貯金利子		56
計	19,695,795	19,168,130

〈支出の部〉 単位：円

支出	予算	決算
会誌印刷費	2,000,000	1,912,776
予稿集印刷費	800,000	922,900
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	300,000	111,899
中国語学セミナー開催経費	200,000	133,000
通信費	500,000	446,972
事務費	2,000,000	1,857,285
大会事務費	300,000	1,119,975
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	450,000	450,000
編集委員会経費	120,000	60,000
学界展望関連経費	300,000	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	58,500
ホームページ関連経費	180,000	62,592
大会運営委員会経費	220,000	195,000
辞典編纂委員会経費	180,000	0
旅費交通費	700,000	315,000
会議費等雑費	180,000	81,000
学会奨励賞	100,000	100,000
国際会議開催支援金	500,000	500,000
選挙関連費	100,000	0
積立金 [内訳] 記念大会積立金(38万) 事務委託関係積立金(130万) ウェブサイト構築積立金(50万) 国際会議開催支援積立金(10万)	2,280,000	2,280,000
予備費	7,823,795	7,919,231
計	19,695,795	19,168,130

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2020年9月15日

2019年度会計監査 小方伴子 印

2019年度会計監査 加藤宏紀 印

2021 年度会計予算案（2021 年 4 月～2022 年 3 月）　2020 年 11 月 15 日総会承認

単位：円

＜収入＞	
前年度繰越金	5,541,795
積立からの繰入金	2,420,000
通常会員･海外会員会費収入	5,000,000
賛助会員会費収入	600,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	0
学界展望補助金	300,000
計	14,261,795

＜支出＞	
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	0
大会助成費	300,000
支部活動助成費	200,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	300,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望編集委員会経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	120,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
選挙関連費	50,000
会員名簿印刷費	0
積立金	2,560,000
[内訳]	
記念大会積立金(42 万)	
事務委託関係積立金(134 万)	
ウェブサイト構築等積立金(50 万)	
国際会議開催支援積立金(30 万)	
予備費	3,819,795
計	14,261,795

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています（いずれもオンライン開催）。

関東支部：2021 年 3 月
北陸支部：2021 年 3 月
中国支部：2021 年 2 月以降

次年度以降もひきつづき支部例会への発表、参会を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることもありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

また、次年度もオンライン開催を原則とするかどうかについては、決定次第、学会ウェブサイト等でお知らせいたします。

（事務局）

第 71 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 71 回全国大会は、2021 年 11 月に開催する予定です。開催日および開催校は未定です。決定次第お知らせいたします。また、ワークショップおよび一般研究発表の応募要項についても決定次第学会ウェブサイトに掲載いたします。

（第 71 回全国大会準備会）

事務局からのお知らせ

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋勸、郭海燕、続三義、石汝傑、張篠平、中野尚美、長谷川龍太郎、林君穂、楊達、楊明、楊立明、賀南、湯翠蘭、潘詩羽、石亮亮、小島良佳、金震海、東孝拓、李偉、楊洲、王姝茵、孫日環、宮雪、陳冬姝、郭楊、胡良娜、劉妍、恵詩文、李宛、張茜、張婉清、梁銘、孫徳坤、何潔、孫婧、王巍、賈皓煬、杜天邑、尚堃、周依漪、楊洋、王仁靖、賈柱、李怡寧、李筱婷、王卓、李哲

（敬称略）

■ 2020 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局か

らお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

■　顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2021年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■　予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、第61回から第69回までは2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトの「過去の予稿集について」をご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■　事務局への問い合わせ

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

なお、現在、新型コロナウイルス感染症の影響で、事務局宛の郵便物の受け取りが非常に遅延している状況です。事務局への通知やお問い合わせは、可能な限りメールでお願いいたします。

訃　報

本学会名誉会員である坂井健一先生（日本大学名誉教授）におかれましては、2020年11月12日に満95歳の生涯を閉じられました。また、本学会名誉会員である塚本照和先生（天理大学名誉教授）のご親族から、塚本先生は2017年にお亡くなりになられたというご連絡が事務局に届きました（まだ名簿に記載があったため）。ここに謹んでお知らせいたします。お二人の先生方の多大な功績を讃えるとともに、永年にわたって本学会ならびに中国語研究と教育の発展に寄与されたご尽力に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2020年12月
日本中国語学会会長　小野 秀樹

日本中国語学会会報　2020 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒153-8902　東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部中国語部会内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2020 年 12 月 24 日